八尾高校

図書部誌

R5年度

目次

Akari

数値化

『天空の蜂』 あらすじ

私的レビュー

私的ランキング

読書のすすめ

無題

Akari

[この世界が暗闇に飲み込まれても
君がいるから
Don’t cry　もう泣かなくていい
毎回　君に救われてきた
何百回　永久に永久に
君は僕の世界守るヒーロー
YES or NO　鐘ならし勇気出して
Don’t stop 次々に進めよ
今日だって　過ぎ去って
Everything’s gonna be alright, yeah!]

ふと流れてきた
この曲を聴くと私の高校時代を思い出す…

私は高校のとき陸上部に所属していた。
種目は100メートル。中学時代からやっていて、良い成績を残していた。けれど高校に入ると、他の人たちも実力があり中々成績を残せず、焦っていた。そんな中、ある日の練習で私は足を捻挫してしまった。医者には1〜2ヶ月は絶対安静だと告げられた。私はショックを受けしばらく動けなかった。それを察した親は家でも私に気を遣い、いつもなら学校生活はどうだとか勉強しなさいとか言うのに、捻挫をしてからは、私が何をするにも「お前は何もしなくていい」と言い、私を客のように扱い何もかもしてくれる。楽だけれど、どこかの他人になったようで家に私の居場所がないと感じるようになった。部活ではみんなの成績が伸びているのをただ見ているだけの日々に私の気持ちのやり場がなくなった。それから部活を休みがちになった。誰もいなくなった教室は外にいる運動部の人の声が際立って聞こえてくる。そんな教室で毎日一人泣くようになった。

そんな毎日が続いて一週間たったある日、その日も私は泣いていた。すると突然私の耳にイヤホンが差し込まれた。そこから流れたのがあの曲だった。私が泣き止み落ち着くと隣に座ってくれていた幼馴染みの彼がゆっくりと話しだした。
「今はすべてがプラスチックみたいに無味無臭に感じ、次々とうわべだけの『大丈夫？』「時間が解決してくれるよ！」とかの君に気を遣う人の話が聞こえ、時間だけが過ぎていく毎日だと思う。だけどみんな君と同じようにすべてが上手く行っていない。だからこそ上手くいくような人になりたいと思ってるんだよ。今、現在と過去と未来ずっと君の輝いている命、姿とプライドを僕に見せてよ。ね、だからもう泣かないで！泣く必要なんてないから…なんてカッコつけたけど今僕が君にこんな言葉を言えるのは僕がつらい時、毎回君に救われてきたからなんだ。
ほら！覚えてる？僕が水泳で、なかなかタイムを縮めることができなくて挫折しそうなときずっと君は僕のそばにいてくれたよね。だから何百回どんなことがあろうとも永久に君は僕の世界を守るヒーローだし、僕も君にとってのヒーローでありたいと思ってるんだ。」と彼は言葉を選びながらゆっくりと話し、そして時には思い出を思い出し、懐かしむように遠くを見つめ目を細めたりしながら話していた。
そんな彼の言葉は私を励まし、yes noと思い切り鐘を鳴らすみたいに勇気と答えを出しなよ。と私の背中を押してくれているようだった。そう感じるようになるまで少し時間がかかったけれどそう感じるようになってからは、どんな困難があろうとも立ち止まらず次々に進もうと思えた。
だって何もせずとも今日は過ぎ去っていくし、そうすることですべて上手くいくようになるかもだから！
その日から私達は互いに悲しい時、失敗をした時、そして落ち込んだときはあの歌を一緒に歌い、流れていく時間を感じた。そんなことを二人揃ってしていると怖いことも嫌なことも何だってよく思えてきて、自分の見てる世界が、暗闇から光へ描き変わっていった。（そして悩みだった陸上のこともタイムにこだわらず楽しく走ることが出来ればいいと思えるように

なり、そこからの部活生活は楽しく過ごすことが出来た。家族にも自分の悩みを打ち明けてみるととても親身になって聞いてくれて、親も私のことが心配で、でもどうしたらいいのか分からなかったらしい。そんなことを知って、自分に味方がいると思うこと、そして思い方次第で世界が変わることを肌で感じた。）

大人になった今、私達はお互いに支え合って生きている。そうやって生きていく中で人生には難しいことも楽しいこともあることに気がついた。
だから今度は悩んでる人に、もう諦めないであなたはあなたのままでいいからと言えるような人になりたい。そう思いながら、心理カウンセラーという仕事に就いた。それからたくさん壁にぶつかり、そしてこれからもまたたくさんぶつかることもあるだろうけれどあの高校時代を思い出し乗り越えよう。そう思い、強く一歩踏み出した。

補記
最後まで読んでくださりありがとうございました。この話はアカリという歌の歌詞を元にしたものです。よければ聴いてみてください。
そして、この物語の主人公のように皆さんも、今までたくさんの壁に出会ったことでしょう。そしてまたこれからも壁にぶつかり立ち止まったりすることもあると思いますが、それを乗り越えその先にあるものを掴み取ってください。
最後に…皆さんが壁にぶつかりそれを乗り越えるとき、あなたのそばにいて支えてくれる人に出会えますように。

by GReeeeNモドキ

数値化

この世界でもし相手の愛情や信頼を数値化して見られたのならと思った人はいるのではないでしょうか。そんなことを実現した世界を今からお見せしましょう。

ある日、お互いの愛情や信頼が数値化され、見られるようになった。
人々は喜び、社会は上手く回っていた。

ある学校では、片思いだと思って心に秘めていた恋だったけど好きな人の私への愛情度が高かったので思い切って告白してみたら好きな子は照れながら「もう君に気持ちはバレてるかもしれないけど…」と気持ちを伝え合い、付き合うことができた。そのようなカップルが次々に生まれた。
ある会社では、いつも、私の出した案に沢山の直しを書き込み、やり直しを何度もさせる厳しい上司がいた。けどホントは上司がすごく私のことを信頼していて、私を育てるために厳しく接してくれていたことを知り、私は上司のことを尊敬し信頼するようになった。
また、私にはいつも私の服装や髪型、そして性格について「先輩は仕事以外は雑ですよね～だからデスクが散らかるんですよ…ちょっと片付けたらどうです？」「髪束ねてみたりしたらどうですか？邪魔になりません？」「あーやっぱおろしてた方が落ち着いた人に見えるので元に戻してもいいかもです」などと言い、なにかと構ってくる後輩がいる。私は正直周りをうろちょろされて少しウザいと思っていたけれど、仕事面では私への尊敬度が高く、とても尊敬してくれていて、それを知ってからは私のお気に入りの後輩になった。

私はある会社がとても好きでイベントを絶対に成功させたいと思っている。しかし相手側の会社がこちらをあまり信用してない様子だったので中々契約など進まなかったけれど数値化により、私のその会社への好き度、信頼

度が相手に伝わり多くの取引、契約やイベントが決まって進み無事成功した。

ある家族内では反抗期の子供に対して親はどう対応したら良いのかわからなくなり、次第に関わる時間が減り、親子間に溝ができ始めた頃、子供が自分への親の愛情の多さを知り、こんなに愛情をくれている親に反抗してばかりで何もしてない自分がちっぽけに見えて申し訳なくて親孝行しようと思い始めた。それに気づいた親は子供にもう一度歩み寄り、話しをした。そうしたことで子供も最後のチャンスだと思い親の話を真面目に聞いた。子供と大人間の壁を壊した。

そんな世界もずっとは上手く行かず、しばらくすると異変が出てきた。

学校では話しかけてくれた子がいたけれどその子の愛情をみて愛情がない人だと判断し、関わろうとは思わなくなったり、相手の愛情をどれだけ上げられるかというゲームをして人の彼氏を奪ったり、そして彼氏又は彼女の愛情度の減少を見えるようになったことが起爆剤となり、「私、僕のことは好きじゃなくなったの？」と言って口論になり距離を置き、自然消滅によって別れていったカップルたちが多く出てきた。
会社では新人が入ったとき、先輩たちは新人の信用度がなくてパワハラなどで訴えられることが怖くて最低限のコミュニケーションしか取らなくなったり、初めての会社との契約のとき、自分の発言で相手の信用度が下がり自分のせいで契約が破棄されることを恐れて自主的に発言する人が減った。
家族では親の愛情が自分に向いていないことを知った。それからどこにも居場所がなくなったように感じ、学校で一緒にいる友達との友情度も低く、友達に頼ることも出来ず頼る人もいなくて自ら命を断つ子供。
夫の愛情がなくなっていることに気づいて、おかしいと思い、探偵に調べてもらった。

そうすると案の定、私へ向けられていた愛情は今や他の若い女へ向けられていた。また、それが夫のただの片思いならまだ子供がいるのでギリ許せるものの、夫は不倫をしていたのだ。それが火薬となり、ある日、夫が子供に暴力をふるったことで火が付き爆発した。暴力を振るった理由は、子供が不倫に薄々気づいていてそれについて父親に問い詰めたことだった。子供は自分のせいだと己を憎んだ。そして夫は離婚届を突き出し若い女と出ていった。残された二人の妻の方は離婚届を受理して前よりももっと忙しく働きだした。残った子供は父親を追い出した自分を恨んでいるのではと思い込み、母親の愛情を見るのが怖くなった。更に追い打ちをかけるように母親は忙しく働き出したことで話をする時間も少しずつ減って行き、子供は部屋にこもり気味になった。母は忙しくてどうすることも出来なかった。
そうやって家族がバラバラになった。

このように世界が変わってしまった今、この世界は今後どうなって行くのだろうか…

〜〜〜
ここまでこの世界を見てみてどうだった？
多分なんだコレ？意味がわからないなとなったことでしょう。
あ…それよりも先に自己紹介をしよう！
私はこの世界を作った神"メーター"だ。
もうおわかりの通り愛情、信頼などを数値化させたのも私。
ほんとに人間とは面白いものだよね。
みんなはこの世界が変わってしまった原因は何だと思う？
私の考えは言ったら面白くないから言わないけど…この話の根底にあるのは愛情や信頼などを築くのには時間が掛かるということ。
それを頭に入れながらもう一度見てみたら新しい見解が出てくるかも！？

byメーター

図書部的オススメの本たち

　私達図書部の部誌を手にとってくださってありがとうございます！このコーナーでは私がオススメする小説を紹介します！

～もくじ～

１，『天空の蜂』あらすじ

２，私的レビュー

３，私的ランキング

『天空の蜂』 東野圭吾

　海上自衛隊向けのヘリコプターとしての導入が決定された「CH-5XJ（通称ビッグB）」が領収飛行を行う予定だったある朝。
錦重工業航空機事業本部に勤務している湯原と山下はそれぞれの妻子を連れ本部の位置する錦重工業小牧工場を訪れていた。
　湯原の息子・高彦と山下の息子・恵太は母親に許可をとり飛行場に向かうが、いたずら心がはたらいたのだろうか、なんとビッグBが格納されている第三格納庫に入り込みビッグBの機内に乗り込んでしまう。

　午前8時、領収飛行予定時刻ではないにも関わらず何者かによって第三格納庫の正面扉が開かれ、ビッグBはひとりでに移動を開始。恵太はヘリから脱出できたが、高彦は脱出できず取り残されてしまう。高彦をのせたままビッグBは湯原たちの目の前で離陸、その後ビッグBは福井県敦賀半島に設置された原子炉・核燃料開発事業団の高速増殖原子炉「新陽」の上空でホバリングを開始する。
　すると、「新陽」と炉燃本社、福井県庁、福井県警察本部などの15か所に『天空の蜂』を名乗る者から「我々の要求を呑み、実行すればビッグBを安全な場所へと移動させる。背けば新陽にビッグBを墜落させる。」という旨のFAXが届いた。ビッグBの燃料のリミットは午後2時、湯原たちは高彦を救出し「新陽」を守れるのか、、、、、、、、、、。

私的レビューコーナー！！

　このコーナーでは、私が過去に読んだ作品を独断と偏見で勝手にレビューしていきます！基本私は小説を読むと全部面白いと感じてしまうチョロい人種なので評価は基本星☆☆☆☆☆です！

『天空の蜂』東野圭吾　星☆☆☆☆☆

　これまでに読んだ作品のなかでもトップレベルにお気に入りな一冊です！いつヘリが墜落するか分からない緊張感が読者にも強く伝わってきます。ほっと一息つけるシーンがほぼないので、あっという間に読み進められます！原発のシステムについて詳しく解説されているので今の時代読んでおいて損はないかも、、、

『AI崩壊』（入江悠）　星☆☆☆☆☆

　映画「AI崩壊」をノベライズした小説「AI崩壊」。私は劇場版のAI崩壊を見に行っていないので比較はできませんが小説版めちゃくちゃいいです。舞台は2030年の日本。国民の個人情報と健康を管理しているAI「のぞみ」が不要な国民を選別して殺戮をはじめます。警視庁捜査AI「百眼」VS「のぞみ」開発者の戦い！！
個人的には桜庭理事官がかっこよくて好きです。

『神を喰らう者たち』新藤冬樹　星☆☆☆☆☆

　イタリアのマフィア（通称マフィオソ）に関する組織内抗争や、また組織に大切な人を殺された登場人物たちが戦うお話。戦うときには、マフィアなので基本銃を使用するのですが、人間が銃で打たれたときの描写がリアルかつ芸術的！胸糞シーン、グロテスクなシーンはかなり多め、、、ですが、最後の最後の復習シーンが超快感！！！グロい、、、、けど読んでほしい！！

『ジェノサイド』高野和明　星☆☆☆☆☆

　突然死した父から残されたメッセージをもとに難病の新薬開発に奮闘する薬学生・古賀研人、難病の息子を救う資金を得るためにアフリカでの極秘任務に赴く傭兵イエーガー。違う場所で戦う２人の世界線がどんどん交わっていきます。この話も胸糞シーン、グロテスクなシーン多め。でも読み終わったあとにすごく考えさせられるし、余韻から抜け出せない！！

『R帝国』中村文則　星☆☆☆☆☆

　国家党が議席の99%を占めるほぼ一党独裁政権状態にあるR帝国とその近辺の国とで繰り広げられる戦争のお話。このR帝国という国はおそらく日本をモデルにしていて、日本がこれからR帝国のような自由のない国になるのではないかという作者の考えが感じられる1冊。最後が意外とモヤモヤしますが、スーーーッと読めます。

小説ランキング

～胸糞悪い部門～

1位『神を喰らう者たち』
2位『ジェノサイド』
3位『R帝国』

～ハラハラ部門～

1位『ジェノサイド』
2位『天空の蜂』
3位『AI崩壊』

小説ランキング

～余韻すごい部門～

1位『ジェノサイド』
2位『天空の蜂』
3位『神を喰らう者たち』

～社会情勢に切り込んでる部門～

1位『AI崩壊』
2位『R帝国』
3位『天空の蜂』

読書が苦手な人へ…！

読書のすすめ

オムニバス小説のすすめ

皆さんは『オムニバス小説』というものをご存知ですか？オムニバス小説、というのは、複数の作品を1冊にまとめた「選集」のことです。「アンソロジー」と呼ばれることもありますね。説明のとおり、オムニバス小説は短めのお話があつまったものなので、「1つの話を300ページも読めない（泣）」という方にとってもおすすめ！私のおすすめは怪談集です

WEB小説のすすめ

私が読書嫌いな皆さんに本当におすすめしたいのがWEB小説（オンライン小説）です！WEB小説はスマホ1つで、スクロールするだけで活字が読めます。検索機能で好きなジャンルを指定したり、短編or長編を指定できるので気軽に活字の世界に入り込むことができます！WEB小説は、アマチュアの作者さんが多いので砕けた表現や今っぽい表現が用いられていることが多々あり、紙の小説よりも読みやすいんです！

グサリ・・・・・・「えっ・・・」

ドサッ

「先生!!　先生!!　先生！！」

「…くん、、、逃げて！・・」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「はっっ！！」
「夢か、、、」
「蓮見先生に質問してるところに来るとは、ビックリしたわ。
じゃあ学校に行く準備しますか
今日は何曜日ですかっと…………え⁉」
2012年6月13日
カレンダーにはそう書かれていた。
「どういうことだ？
昨日は2023年6月12日だったはずだ。」
（確かに数列や微積分の知識がちゃんとある‥
　タイムリープしたってことなのか？
ってことは、、先生が刺されかけるのは、本当ってことか）
（ってことは、、、先生がまた危なくなる！
　どうしようか？　助ける。）

そこから僕の鍛錬が始まった。
最初の頃は毎日町内2周、腕立て伏せ・腹筋・反復横跳びを各50回ずつ。中学の頃には、毎日校区内2周、腕立て伏せ・腹筋・反復横跳びを各200回ずつ出来るようになった。
それに並行して、空手、剣道、合気道を習得した。
刃物を避ける訓練はマジの刃物を使いだして死ぬかと思ったけど、なんとか準備は整った。

2023年6月12日

（ついにあの日が来た。
今回は、先生が刺される前に、襲撃者を捕まえて、
なんとしても守りきって見せる！！）
（確か先生の後ろから襲ってきたから、非常階段の方から来たんだろう。
まず下準備だ、、）

午後4時31分
ピコンッ
（あっ！
とうとうきやがった。
非常階段の出入り口にセンサーを取り付けておいて正解だったぜ。
先生にも事情を説明して、別室に待機してもらっているし、
あとは襲撃者がここに来るのを、先生のフリをした僕が待つだけだ。）

コッコッコッコッ
「うおらあああああああ」
スッ　ヒュッ　ドサッ
「何！？」
「引っかかったな。
おまえは、まっすぐにここに向かってた。
一体誰の命令だ。」
「言うもんかよ！」
「なら、仕方ねえな。ちょぉっと失礼。」
「何しやがる！？」
「何って当然スマホを探してるんですよ、、、みぃっけ」
ピロン
「おっと　いいところに」
（ふーんそうか、、あいつが）
「…くん　大丈夫？」

「あっ　先生。もちろん大丈夫ですよ」
「先生、僕は用事ができたんで、この場まかせていいですか？」

「こんにちは。こんなとこで、どうしたのですか？　校長。」
「はい。こんにちは。どうしたも何も蓮見先生に呼ばれたので、来たんですよ。当の本人はどうしているんでしょうか？」
「先生は来ませんよ。
今頃校長が差し向けた犯人を警察へ付き渡しているところなんじゃないですか？」
「何!?!?」
「どうしたのですか。校長　そんなに慌てて。
てっきりお仲間から知らされているもんだと思っていましたよ。
よくご存知でしょう？　校長。
まあ、もうすぐ校長じゃなくなりますけどね」
「どういうことだ。」
「そのままの意味ですよ。
今回の校長が襲撃者に蓮見先生に襲わせたという証拠は、
全て警察に襲撃者と一緒に渡しました。
もうじきこっちに警察の人が来るので大人しく捕まってくださいね。」
「てめえぇぇぇぇ」
（やべー、、校長もうあとがないからって飛びかかってきよった。
まあ余裕なんだよな。）
「校長覚えていますか？
僕、武道経験者ですよ？敵うとお思いで？」
「ふっ」　パシッ　クルッ　ドスン
「離せ！！」
「ハイハイ　落ち着いて
もうすぐ警察の人来ますよ。」
「こんにちは。八尾警察署のものなんですが
犯人の身柄を渡してもらってもいいでしょうか？」
「もちろん!!　この人が犯人です。よろしくお願いします。」

これでこの件は一件落着し、なんにも背負わなくていい日が来た。

数ヶ月たって、、、、
「卒業生　退場！！」
「卒業式終わりましたね、先生」
「先生、、、言いたいことがあるんですが、、、
僕と付き合ってくれませんか？お願いします!!」
「1回目の襲撃から守ってくれたときからずっと好きでした。
…くん、こちらこそお願いします」
「よかったー！　　ん？　一回目の襲撃？」
「そうなの、実は私も1回目の記憶があるのよ」
「えええええええええええええ！！！！！」

おしまい